

12月の講座「往生とは何か」(1)

〈無量寿経〉の根本関心——国土に生まれる

加来雄之(親鸞仏教センター主任研究員)

はじめに

・私にとっての〈無量寿経〉の伝統——私にとっての親鸞の浄土思想——親鸞に学ぶ〈無量寿経〉の根本関心——「如実」という課題

I 「(従)如来(生)」

(1) 「如来」のさまざまな定義

・「如来 tathAgata……修行を完成した者の称、諸宗教を通じて用いられていた。後にもっぱら釈尊の呼称となり、さらに大乘仏教では諸仏の呼称となった。サンスクリット言語 tathAgata の語源・原義に関しては諸説があり、確定していない。……当時一般に周知の語だったらしく、初期の仏典では語義説明がされていない。教理的な解釈が現れるのは部派仏教になってからである。……中国仏教では概して〈真実より衆生の世界へ来たもの〉と解釈している。」(『岩波仏教辞典』)

—曇鸞の如来観……『智度論』『十住毘婆沙論』の定義

(2) 親鸞聖人の如来観

・「如より来生して法の如如を解り、善く習滅の音声の方便を知りて、世語を欣ばず。楽いて正論にあり。もろもろの善本を修し、志、仏道を崇がん。」(『大無量寿経』『聖典』54頁)

・「しかれば弥陀如来は如より来生して、報・応・化種種の身を示し現わしたまうなり。」(『教行信証』『証巻』『聖典』280頁)

・「「大無量寿経言」というは、如来の四十八願をときたまえる経なり。」(『尊号真像銘文』『聖典』512頁)

→「大無量寿経言」というは、従如来生を四十八願としてときたまえる経なり

(3) 清沢満之

・「我等の大迷は如来を知らざるにあり。如来を知れば始めて我等の分限あることを知る。〔中略〕如来の奴隷となれ、其他のものゝ奴隷をなること勿れ。」(岩波『清沢満之全集』第八巻・453-4頁)

II 〈無量寿経〉の原風景——序(発起序)【資料1参照】

- ・なぜ仏教の歴史において〈無量寿経〉が誕生したのはなぜかなくてはならなかったのか。
- ・序分——阿難の問いに学ぶ

「去来現の仏、仏と仏とあい念じたまえり。今の仏も諸仏を念じたまうこと、なきことを得んや。何がゆえぞ威神の光、光いまし爾る」と。（「教巻」引用『大無量寿経』『聖典』153頁）

・序分——世尊の応答

「仏の言わく、「善いかな阿難、問えるところ甚だ快し。深き智慧、真妙の弁才を発して、衆生を愍念せんとして、この慧義を問えり。如来、無蓋の大悲をもって三界を矜哀したまう。世に出興する所以は、道教を光闡して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもってせんと欲してなり。無量億劫に値い難く、見たてまつり難きこと、靈瑞華の時あつて時にいまし出するがごとし。今問えるところは饒益するところ多し。一切の諸天・人民を開化す。阿難、当に知るべし、如来の正覚はその智量り難くして、導御したまうところ多し。慧見無碍にして、よく遏絶することなし」と。已上」（「教巻」引用『大無量寿経』『聖典』153頁）

・序分と流通分との呼応——「難」

仏に出遇い、教法を聞き、信ずるといふことの「難さ」——「伝承」の難・「己証」の難

【資料2『浄土和讃』大経意①】

・たとえばもっとも古い〈無量寿経〉である『大阿弥陀経』の経説は次のように締めくくられる

仏言く、師は人を開導するに、耳目・智慧明達にして、人を度脱して、善く泥洹之道に合ふことを得しむ（令）。常に当に仏を孝慈すること父母のごとくすべし。常に当に師の恩を念ずべし。常に念じて絶えざれば即ち道を得ること疾からむと。

仏言く、天下に仏有す者甚だ値ひ難し。若しは沙門有りて師の若く人の為に経を説く者、甚だ値ひ難し。」（『浄真全』一・198-9頁。＊『平等覚経』もほぼ同文。）

### Ⅲ 二つの世界——衆生の世界（穢土）と如来の世界（浄土）との関係

〈無量寿経〉は、序分と流通分を通すと、仏陀との出遇い（見たてまつる）とその言葉を正しく聞き受けとめる（仰せを仰ぐ）ための経である。仏陀に値遇しようとするものは、まず教を説く仏陀の心に出会い、その中に入り、そのなかに住まう必要がある。この課題を説き明かすのが〈無量寿経〉の「生まれ」という意義であろう。

・浄土とは何か——仏に出遇うための世界。〈無量寿経〉の浄土は穢土を摂化する世界

・通俗的な阿弥陀仏の浄土のイメージと〈無量寿経〉に説かれる阿弥陀如来の国土とのズレ—死者の国としての浄土——冥土・来世・天国——阿弥陀如来の国土は三界の中の世界か——極楽・安楽・安養・浄土・仏身仏土。

・『岩波仏教辞典』の定義—「往く浄土」「成る浄土」「在る浄土」—他力の教えにおける浄土とは？—「将来する浄土」（武内義範）—「摂化する浄土」。

### Ⅳ 正宗分の内実

〈無量寿経〉は、その「生まれ」を、阿弥陀仏の因位の本願とその成就を説くのである。現存する〈無量寿経〉の諸本には共通して、前半には、法蔵比丘の発願修行と阿弥陀仏とその国

土の功德（如来浄土の因果、所行所成）が、後半は、阿弥陀仏が衆生を摂しみずからの国土に生まれさせる道と衆生がえる利益（衆生往生の因果、所撰所益、還相）が説かれている。

「初 広く如来浄土の因果」所行（因）  
如来の広説「」所成（果） を説きたまえるなり。  
「後 広く衆生往生の因果」所撰（因）  
「」所益（果） を顕したまえるなり。

・「（述文賛）憬興師の云わく、如来の広説に二あり。初めには広く如来浄土の因果、すなわち所行・所成を説きたまえるなり。後には広く衆生往生の因果、すなわち所撰・所益を顕したまえるなり。」（「行巻」『聖典』182頁）

## V 生まれ方への問題提起

### （1）三つの生まれ方——「聞仏説法」の三つの課題

現存するすべての〈無量寿経〉には、阿弥陀仏の「国土に生まれる」ことについて以下にあげる三つの生まれ方が説かれてい三つの生まれ方とは簡単にまとめれば次のような内容である。

- （ア）阿弥陀仏の光明・名号による生まれ
- （イ）衆生が修するそれぞれの功德による生まれ
- （ウ）疑いによる生まれ

初期〈無量寿経〉には、三つの生まれ方が、後期〈無量寿経〉ほど明瞭に説示されているわけではない。しかし後述するように確かに三つの生まれ方が説かれているのである。このように三つの生まれ方が説かれている以上、いずれか一つだけを正しい説とするのは正しい態度ではない。むしろ私たちは、三つの生まれ方を説かなくてはならなかった〈無量寿経〉の作者たちの課題とはなにであったのか、その経の課題がどのように展開していったのかを理解することこそが必要である。つまり三つの往生が説かれた意図を窺うことが適切な態度と思うのである。

・【資料2『浄土和讃』大経意②】

### （2）臨終を契機とする生まれ方と臨終を契機としない生まれ方

- ・浄土への生まれについての二つの語り方——如来の功德と衆生の功德
- ・生と往生
- ・臨終を契機とする浄土への往生  
三輩文
- ・臨終を契機としない浄土への往生についての言説——第十八願成就文  
「本願成就の文、『経』（大経）に言わく、諸有衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。かの国に生まれんと願ざれば、すなわち往生

を得、不退転に住せん。ただ五逆と誹謗正法とをば除く、と。已上」（「信巻」引用『大無量寿経』『聖典』212頁）

**（3）親鸞による生まれの根本原理の発見——如来の「欲生」心——「如来の勅命に二種あり」**

・「次に「欲生」と言うは、すなわちこれ如来、諸有の群生を招喚したまうの勅命なり。すなわち真実の信樂をもって欲生の体とするなり。」（「信巻」『聖典』232頁）

・「『浄土論』（論註）に曰わく、「云何が回向したまえる。一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、回向を首として大悲心を成就することを得たまえるがゆえに」とのたまえり。回向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。往相は、己が功德をもって一切衆生に回施したまいて、作願して共にかの阿弥陀如来の安樂浄土に往生せしめたまうなり。還相は、かの土に生じ已りて、奢摩他・毘婆舍那・方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向かえしめたまうなり。もしは往・もしは還、みな衆生を抜きて生死海を渡せんがために、とのたまえり。このゆえに「回向為首得成就大悲心故」と言えり、と。已上」（「信巻」引用『浄土論註』『聖典』233頁）

**おわりに**

・如来内存在の自覚——如来大悲の場を生きるものとなる——如来の智慧に照らされることによって穢土が従如来生の教化を受ける場となる。

安田理深（1900年-1982年）——「存在」という概念によって浄土を実存的に基礎づけるという課題。人間は国（真の共同体）をもとめて流転している。

「名号だとか、浄土だとか、信心だとか、いろいろな仏教の教理概念があるが、それは何をあらわすかということ、存在の意味を語っている。それが宗教問題である。宗教問題が人間の根本問題である。……存在の意味によって、〔存在の〕病気が癒されるのであって、それを救いという言葉であらわす。救いには価値は無用である。救いという問題に関しては、いかなる価値も役に立たない。」（「存在の意味」『安田理深講義集4』105頁）

「早計に考えれば、有限というものがいないところが浄土のように思われるが、有限がないのではない。それを包括したところである。／安立するとは、有限のものが安立することである。すなわち、有限を通してあらわす無限が浄土である。……〔仏は〕絶対無限の痛みとして存在するものである。だから、自己反省によつてのことではない。如来の痛みである。さらにいえば、法性の痛みである。」（「故郷」『同』55-56頁）

⇒存在（ブハーバ）の故郷（ニルヴァーナ）

『教行信証』「教巻」引用〈無量寿経〉発起序の包含関係

『大無量寿経』に言わく、

〈証巻で前略される部分〉

爾時世尊、諸根悦予、姿色清浄、光顔巍巍。尊者阿難、承仏聖旨、即從座起、偏袒右肩、長跪合掌、而白仏言。

〈阿難の問い〉

今日世尊、諸根悦予し姿色清浄にして光顔巍巍とましますこと、明らかなる鏡、淨き影表裏に暢るがごとし。威容顕曜にして、超絶したまえること無量なり。未だかつて瞻觀せず、殊妙なること今のごとくましますをば。ややしかなり。大聖、我が心に念言すらく、「今日、世尊、奇特の法に住したまえり。今日、世雄、仏の所住に住したまえり。今日、世眼、導師の行に住したまえり。今日、世英、最勝の道に住したまえり。今日、天尊、如来の徳を行じたまえり。」去来現の仏、仏と仏をあい念じたまえり。今の仏も諸仏を念じたまうこと、なきことを得んや。何がゆえぞ威神の光、光いまし爾る」と。

〈釈尊による阿難の問いの吟味〉

ここに世尊、阿難に告げて曰わく、\*i「諸天の汝を教えて来して仏に問わしむるか、自ら慧見をもつて威顔を問えるか」と。  
\*i 〈原文では「云何阿難」あり〉

阿難、仏に白さく、「諸天の来りて我を教うる者、あることなけん。自ら所見をもつて、この義を問いたてまつるならくのみ」と。

〈釈尊の応答―出世本懐〉

仏の言わく、「善いかな阿難、問えるところ甚だ快し。深き智慧、真妙の弁才を發して、衆生を愍念せんとして、この慧義を問えり。如来、無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したもう。世に興する所以は、道教を光闡し、群萌を拯い、恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。無量億劫にも値いがたく、見たてまつりがたきこと、靈瑞華の時あつて時にいまし出ずるがごとし。今問えるところは饒益するところ多し。一切の諸天・人民を開化す。阿難、当に知るべし、如来の正覺はその智量りがたくして、導御したまうところ多し。慧見無碍にして、よく遏絶することなし」と。已上

〈証巻で後略される部分〉

以一餐之力、能住寿命、億百千劫、無数無量、復過於此。諸根悦予、不以毀損。姿色不変。

光顔対曰唯然。願樂欲聞無異。所以者何、如来定恵、究暢無極。於一切法、而得自在。阿

難諦聽。今為汝説。

【阿難の問いの意味―問いの絶讃】

『無量寿如来会』に言わく、

阿難、仏に白して言さく、「世尊、我如来の光瑞希有なるを見たてまつるがゆえに、この念を發せり。天等に因るにあらず」と。

仏、阿難に告げたまわく、「善いかな、善いかな。汝、今快く問えり。よく微妙の弁才を觀察して、よく如来に如是の義を問いたてまつれり。汝、一切如来・応・等正覚および大悲に安住して、群生を利益せんがために、優曇華の希有なるがごとくして、大士世間に出現したまえり。かるがゆえにこの義を問いたてまつる。また、もろもろの衆生を哀愍し利樂せんがためのゆえに、よく如来に如是の義を問いたてまつれり」と。已上

【希有なるものとの値遇―難】

『平等覺經』に言わく、

仏、阿難に告げたまわく、「世間に優曇鉢樹あり、ただ実ありて華あることなし、天下に仏まします、いまし華の出ずるがごとしならくのみ。世間に仏ましますも、はなはだ値うことを得ること難し。今、我仏に作りて天下に出でたり。もし大徳ありて、聡明善心にして仏意を知るによって、もしわすれずは、仏辺にありて仏に侍えたてまつるなり。もし今問えるところ、普く聴き、諦らかに聴け」と。已上

【仏の徳の脚注】

(述文賛) 憬興師の云わく、

「今日世尊住奇特法」というは、神通輪に依つて現じたまうところの相なり、ただ常に異なるのみにあらず、また等しき者なきがゆえに。「今日世雄住仏所住」というは、普等三昧に住して、よく衆魔・雄健天を制するがゆえに。「今日世眼住導師行」というは、五眼を導師の行となづく、衆生を引導するに過上なきがゆえに。「今日世英住最勝道」というは、仏、四智に住したまう。独り秀でたまえること、匹しきことなきがゆえに。「今日天尊行如来徳」というは、すなわち第一義天なり。仏性不空の義をもつてのゆえに。「阿難当知如来正覚」というは、すなわち奇特の法なり。「慧見無碍」というは、最勝の道を述するなり。「無能邊絶」というは、すなわち如来の徳なり。已上

○傍線

は、『如来会』の引文に展開される部分

○薄墨

は、『平等覺經』の引文に展開される部分

○囲み

は、憬興『述文讚』の引文に展開される部分

## 浄土和讃 愚禿親鸞作 大経意 二十二首

親鸞の『仏説無量寿経』の理解を窺うことのできる著述は多いが、ここでは『浄土和讃』の大経意によって『大無量寿経』理解を確かめてみたい。大経意は〈無量寿経〉のおおむね序分、正宗分、流通分という文脈にそって製作され、親鸞が『大無量寿経』をどのような経典として見ていたかが端的に示されていると思われるからである。親鸞の大経意二十二首は次のように構成される。

## ・大経意の構成

第一首から第四首	◎序分（発起序） 難値難見
第五首から第七首	正宗分「如来浄土の因果」とくに名号
第八首から第十六首	正宗分 第十八願・第十九願・第二十願「衆生往生の因果」欲生
第十七首 正宗分	顕通智慧段（「浄土をねがいつつ他力の信をえぬひとは」）
第十八首から第二十首	◎流通分 難信
第二十一首と第二十二首	◎『大無量寿経』が真宗であることを讃えている

第一首から第四首◎序分（発起序）	第十八首から第二十首 ◎流通分
<p>浄土和讃 愚禿親鸞作 大經意 二十二首</p> <p>〔第一首〕 尊者阿難座よりたち 世尊の威光を瞻仰し 「瞻仰」 見奉る、仰せを仰ぐ。 生希有心とおどろかし 希にありがたき心といふなり。 未曾有見とぞあやしみし 未だ昔もかゝる御顔ばせ見奉らず</p> <p>〔第二首〕 如来の光瑞希有にして 「如来の光瑞」 如来の御光、ことによき御形、希有にましますとなり。 阿難はなはだころよく 如是之義ととえりしに 「如是之義」 かくの如きの義、いかなる御事と問ひ奉るにとなり。 出世の本意あらわせり</p> <p>〔第三首〕 大寂定にいらたまい 「大寂定」 静かに静かにましますこと、殊に日頃に勝れましまし給ふ故は、唯弥陀の名号を説き給はむとて世に出でましますこと、殊に勝れ、めでたくまします御かたちなり。 如来の光顔たえにして 「光顔」 御顔ばせ、御かたちなり。 阿難の恵見をみそなわし 問斯恵義とほめたまう</p> <p>〔第四首〕 如来興世の本意には 本願真実ひらきてぞ 難値難見とときたまい 「難値難見」 もうあひ難く、見奉り難し。 猶靈瑞華としめしける 「靈瑞華」 優曇樹の華を靈瑞華といふ。靈瑞華の時あて、時に乃し出づるが如し。優曇樹は実は常になれども、華の咲くこと極めて希なるによりて、仏の世に出で給ふこと、極めて希にまします</p>	<p>〔第十八首〕 如来の興世にあいがたく 「興」 おこす反。 諸仏の経道ききがたし 「諸仏」 よろづの仏の教にも値ひ難しとなり。 菩薩の勝法きくことも 「勝法」 すぐれたる法、勝法といふは六度波羅蜜なり。 これらにあふことも、われらはかたしとなり。 無量劫にもまれらなり</p> <p>〔第十九首〕 善知識にあうことも おしうることもまたかたし よくきくこともかたければ 信ずることもなおかたし</p> <p>〔第二十首〕 一代諸教の信よりも 「一代」 ひとよ。 弘願の信樂なおかたし 「弘」 ひろく、ひろまる。 「信樂なほかたし」 信心ねがふことなほ難し。 難中之難とときたまい 無過此難とのべたまう</p> <p>〔第二十一首〕 念仏成仏これ真宗 万行諸善これ仮〔要〕門 権実真仮をわかずして 自然の浄土をえぞしらぬ</p> <p>〔第二十二首〕 聖道権仮の方便に 「権」 かりに、かりなり。 衆生ひさしくとどまりて 諸有に流転の身とぞなる 「流転」 さそふ反、うつりうつる。 悲願の一乗帰命せよ</p> <p>已上大經意</p>



大經意② 第八首～第十七首 正宗分「衆生往生の因果」(欲生の三願)

第十八願	第十九願	第二十願
<p>(第八首) 至心・信樂・欲生と 十方の諸有をすゝめてぞ シヨウシユジヤウトイフハ二十五 ウノシユジヤウナリ 不思議の誓願あらわして 眞實報土の因とする</p> <p>(第九首) 眞實信心うるひとは シムシムゲウノシンハシンジム ハシンナリ シンジチハシムノ コヽロナリ すなわち定聚のかずにいる 不退のくらゐに住すれば かならず滅度にいたらしむ</p> <p>(第十首) 諸佛の大悲ふかければ ミダヲシヨブチトマフス クワド ニンダウノコヽロナリ 佛智の不思議をあらわして 變成男子の願をたて 女人成佛ちかひたり</p>	<p>(第十一首) 至心・發願・欲生と 十九ノグワン コノグワンオバゲン ゼンダウシヤウノグワントイフ コトアリ リムジユゲンゼンノグワ ントモアリ ライカウインゼウ ノグワントモアリ 十方衆生を方便し ノリ反カタドル反 タヨリ反スナワ チト反 衆善の假門ひらきてぞ 現其人前と願じける</p> <p>(第十二首) 臨終現前の願により ノゾム反 オワリニ反 アラワレム 釋迦は諸善をことごとく 『觀經』一部にあらわして アツム反 ワカツ反 定散諸機をすゝめけり シユジヤウ反 ハタモノ反</p> <p>(第十三首) 諸善萬行ことごとく 至心發願せるゆへに 往生淨土の方便の 善とならぬはなかりけり</p>	<p>(第十四首)《廿グワンナリ》 至心・回向・欲生と 十方衆生を方便し 名號の眞門ひらきてぞ 不果遂者と願じける ハタシトゲムトチカヒタマヘルナリ</p> <p>(第十五首) 果遂の願によりてこそ ツイニハタシトゲシメムトナリ 釋迦は善本徳本を インキヲゼンポントイフ クワキノヲトクホントイフ 『彌陀經』にあらわして 一乗の機をすゝめける キチジヨウキトハホウドニシヤウト セシメン</p> <p>(第十六首) 定散自力の稱名は 果遂のちかひに歸してこそ ジリキノコヽロニテミヤウガウヲト ナヘタルオバツヒニハタシトゲムト チカヒタマフナリ おしえざれども自然に 眞如の門に轉入する ホフシンノサトリヲヒラクミトウツ リイルトマフスナリ</p> <p>(第十七首) 安樂淨土をねがひつゝ 他力の信をえぬひとは 佛智不思議をうたがひて 邊地懈慢にとまるなり ギワクタイシヤウヲヘンヂトイフ コレハ五百歳 [サイ] ヲヘテホウドニ ハマイルナリ シヨギヤウワウジヤ ウノヒトハケマンニオツ コレラハ オクセンマンノトキマレニ一人ホウ ドヘハスヽムナリ</p>